

アフターコロナにおける社会安全学部

私が非常勤講師として講義を行っていた先の受講生に中国人女子学生がいた。彼女が武漢市の出身であることを知っていたため、「武漢は大変なことになっているね。家族や友人は大丈夫？」などと雑談していたのが2020年の年明けだったかと思う。当時はまだ深刻には捉えていなかったが、事態は急激に緊迫感を増していった。その後、世界中に感染拡大してパンデミックとなり、日本でも日常生活が大きく変わる事となった。

本誌「社会安全学研究」も第11巻となり、次なる10年に向けてのスタートを切る事になった。それをCOVID-19という大変な状況の中で迎えるというのも、社会安全学部の持つ宿命だろうか。そのような中、社会安全学部は「ウィズコロナ」に本学部の良さを生かした対応ができていると思う。本学の春学期の講義は完全オンラインとなったが、これは学生だけでなく、教員にとっても初めての経験であった。不慣れなZoomでの遠隔講義に関して、社会安全学部ではインターネット上のコミュニケーションツールであるSlackを活用して、様々な情報を全教員で共有した。Zoomの基本的な使い方に関しての質問・回答、便利な機能についての情報共有などによって、学部全体における遠隔講義の質は底上げされた。4～5月には産経新聞社と本学部でオンラインセミナーを開催し、医学だけでなく、経済学、法学、心理学など様々な観点からCOVID-19を分析し、問題提起を行った。これだけ迅速に内容のあるセミナーを実現できるのは、様々な分野の優秀な教員が揃う本学部ならではの事だろう。本セミナーは学内外で高評価を得ることができ、10～11月には全学に拡大した続編のセミナーが開催された。

まだしばらくはCOVID-19の混乱が続きそうだが、引き続き、教育・研究・社会貢献のすべての面において、本学部の特徴を活かしたプレゼンスを示していくことが重要である。いずれCOVID-19が収束したとき、「アフターコロナ」の社会はコロナ前の状態には戻らず、新しい社会になると言われる。大学での教育や研究においても新しいスタイルが生まれるだろう。社会安全学部はそのときにも旗振り役となって、新しいスタイルの先頭に立ってほしい。

本学部には幅広い分野の教員が揃っている。このことはアンテナを張り巡らす範囲が広くなるという強みに繋がる。その強みを活かして、新しい教育・研究のスタイルを作っていきたい。また、この機会に異分野の教員同士が積極的に共同研究を進めることで、新たな切り口での研究スタイルが生まれることを期待したい。それが「学際的なアプローチによる安全・安心な社会づくりへの貢献」という本学部の設置趣旨に繋がる。そして、その成果を本誌に寄稿いただきたい。本誌「社会安全学研究」の存在意義をより際立たせるためにも。

2021年2月

関西大学社会安全学部長・
大学院社会安全研究科長
川口 寿裕

